

事務局の10年

里見 綽生

昭和58(1983)年5月に佐藤昭夫室長の後任として、熱帯農研沖縄支所から北陸農試虫害研究室に転任した。佐藤さんは研究室をよくまとめられるとともに、地域内の試験研究の連絡調整にも精力を注がれ、地域農試の室長として立派な仕事をされたと思う。当時の私は佐藤さんには及ぶべくもなかったが、永田、菅野、服部という優秀な室員諸氏に助けられたし、また各県農試の病虫主任が江村、常楽、石崎、今村の諸氏で、いずれも虫害部門のすばらしい方々であり、ご親切なご指導をいただいたことは本当にありがたかった。

研究会事務局として58・59年に会計幹事、昭和60年～平成2年には編集幹事を務めたが、会計幹事としてまず気になったのが研究会の財務状況である。当時の会報の会計報告を見ると、昭和57・58年度の収入では会報売上金が675,020,640,690(円)、賛助会費が28万円、36万円で、これに対して支出となる会報印刷代金は1,648,000,1,760,000(円)であり、この2年間の収支は97万円弱の赤字になっていた。このままでは遠からず繰越金を食いつぶしてしまう。当時賛助会員は24社で、会費は1口1万円、数社のみが2口を納めて下さっていた。そこで他の地域の研究会の状況を調べてみると、1口2万円が一般的であったので、各社に手紙を出して1口の増額をお願いしたところ、農薬委託試験に関係のない1社を除いて増額に応じていただいた。また他の研究会の賛助会員名簿を調べて、新たに数社に入会をお願いした。この結果、昭和60年度には賛助会員は29社、会費収入は67万円となった。次に考えたのは、会報の印刷代が高すぎるのではないかということである。会報の印刷は創刊以来長野市の信教印刷(株)に発注していたが、2,3社から見積もりを取り、平成2年の38号から新潟市の第一印刷(株)に変更し、印刷代が2～3割安くなった。これに伴い、用紙をアート紙に変更したので、写真は鮮明になり、カラー印刷も容易になったが、会報の重量が増えた。また、変更初年度は校正にかなりの手数を要した。

編集幹事としては原稿集めに最も苦勞した。会報の発行日は12月25日となっているが、年内に発行できたことは希で、3月末の年度内に間に合わないことも間々あった。昭和60年に研究会が学術団体に指定されたことから、論文掲載を審査制にしたので、その分さらに印刷が遅れることにもなった。だんだん論文数が減り、会報が薄くなってきたので、昭和63年から講演要旨を掲載し、さらに平成3年からは「北陸各県における病害虫の発生と防除の概要」(各県1ページ)を加えた。また、なんとか依頼原稿を掲載したいと思ったが、小野小三郎先生に「北陸病害虫研究会の歴史と今後の発展」を書いていただいたのに留まった。もう一つ、意を用いたのは英文タイトルおよび英文サマリーである。一見して英文タイトルに間違いが多いようでは、それだけで雑誌の価値が低く見られてしまうのではないかと思う。それまでは、間違いに気付いても著者に遠慮して直されなかったのではないかと思うが、私は著者に連絡して訂正させていただいた。ただ、今から見ると、文法的に明らかな間違いを訂正したにすぎず、それ以上は踏み込めなかった。最近の会報の英文を見ても誤りが散見されるので、金を出してでもネイティブの校閲を受けた方が良いのではなかろうか。

平成3,4年度には会長を勤めさせていただいた。とくに何もできなかったが、研究会の運営についてはその後も改善が図られてきたように思われる。本会のますますの発展を祈念するとともに、私も元氣な間は時々出席して、皆様にお目にかかり、お話を伺いたいと願っている。